

多国籍アングロフォンコミュニティの言語変化：

—イギリス人話者による「所有を表す英語表現」の言語内的要因—

平野 圭子 (北九州市立大学)

1. はじめに

本研究の目的は方言接触 (Britain 2018, Trudgill 1986, 2004)の初期段階において、どのように言語変化が起こり進行していくかを検証することにある。様々な英語圏から来日し、少なくとも1年間英語教師として日本で働いている英語母語話者で構成される多国籍アングロフォンコミュニティを調査対象に、a-c 下線部の「所有を表す英語表現」(Jankowski 2005; Kroch 1989; Tagliamonte 2003, 2013a, 2013b; Tagliamonte, D'Arcy, & Jankowski 2010)の使用法に焦点を当て、実時間における言語変化のメカニズムを探る。

a. I ve got an elder sister.

b. I have an apartment.

c. You got the west coast beaches for surfing.

本発表では「所有を表す英語表現」の主語の種類 (名詞句/代名詞; 1人称/2人称/3人称; 単数/複数)、主語の指示対象 (総称/非総称)、目的語の指示対象 (抽象的/具象的) 等の言語内的要因と言語変化の関係を考察する。イギリス、アメリカ、ニュージーランド出身の英語母語話者約40人から収集した合計34時間におよぶ自然談話の言語データより、900個以上の「所有を表す英語表現」を採取した。この自然談話は被験者の来日直後 (第1データ) とその1年後 (第2データ) に、同じ出身国のペアによる自然談話を同一被験者から録音したものである。本発表ではイギリス人被験者に着目し、統計解析ソフトSPSSの「ロジスティック回帰分析」¹の分析結果を提示する。日本で観察される英語方言接触の初期段階において、イギリス人被験者による*have got*の使用が他の言語内的要因に拡大されていく過程を解き明かす。

2. 多国籍アングロフォンコミュニティ

本研究でいう多国籍英語母語話者コミュニティとは、世界各地の英語圏より JET プログラム (The Japan Exchange and Teaching Programme) や語学学校などの英語教師等の在留資格で来日し、1年から数年間日本に滞在する英語母語話者の集団をさす。2019–2020年のJETプログラム参加者は世界57ヶ国から約5700人に上る (CLAIR 2019)。彼らは来日直後から様々な英語方言話者や日本人を含む非英語母語話者らと多種多様な社会的ネットワークを形成し、母国とは異なる言語環境の中で新たなコミュニティを築き上げる。

3. 「所有を表す英語表現」の先行研究

本発表と同じ言語データを利用して Hirano (2016)と Hirano & Britain (in press)はソーシャルネットワーク分析の手法 (Milroy 1980)を用い、「所有を表す英語表現」を方言接触と言語アコモデーション (Coupland 1984; Giles & Powesland 1975)の観点から考察した。表1は第1データ(来日直後)と第2データ(1年後)の「所有を表す英語表現」のバリエーション分布を被験者の出身国別に表したものである。イギリスとニュージーランドグループは*have got*の使用率が最も高い。*Have*は2番目に高く、*got*の使用率は極端に低い。アメリカグループは*have*の使用率が圧倒的に高く、*have got*と*got*の使用率は低い。三ヶ国のバリエーション分布は先行研究の傾向とほぼ一致する (Quinn 2004; Tagliamonte 2013a, 2013b)。

来日1年後、イギリス人はアメリカ英語で頻繁に使用される*have*の使用率を減少させ、かわりにイギリス・オーストラレーシア英語に特徴的な表現*have got*の使用率を増加させている。*Have got*はアメリカ英語ではあまり使われることのない表現である (Tagliamonte 2013a, 2013b)。イギリスグループに見られる変化はイギリス英語をより特徴づける現象であり、アメリカ英語からのダイバージェンスと言える。

¹ ロジスティック回帰分析は特定の変異形(*have got*, *have*, *got*)選択にどの言語内的要因がどの程度統計的に有意な影響力を及ぼすかを予測する。

表1の結果によるとイギリスグループは一見アコモデーション理論の唱える言語行動とは反する傾向を示しているように見える。しかし個々の話者が示す「所有を表す英語表現」の変化の方向や増減の幅は一樣ではなく、グループ全体の傾向と必ずしも一致するものではない。個々の話者別に「所有を表す英語表現」の変化と社会的ネットワークの関係を重回帰分析にかけると、イギリス人被験者に関しては、あらゆる英語圏出身の英語母語話者とのネットワーク強度が1年間の「所有を表す英語表現」使用率変化に対し、統計的に有意な影響力を持つことが判明した(表2)。イギリス人は英語母語話者とのネットワーク強度が高い人ほど、来日1年後に*have got*の使用率が減少し、逆に*have*の使用率が増加する傾向を示す。

4. 方法論

4.1 被験者

本発表の被験者は2000年に来日した英語母語話者で、JETプログラム参加の外国語指導助手36名、語学学校の英会話講師3名の計39名からなる。イギリス人15名(男5/女10)、アメリカ人11名(男7/女4)、ニュージーランド人13名(男3/女10)で構成されている。2000年調査時の被験者の年齢は21歳から34歳で、平均年齢は24歳である。全員ほぼ同レベルの学歴(大学卒以上)を持つ。

4.2 言語データ

福岡県、佐賀県、熊本県在住の英語母語話者に来日直後(第1データ)と来日1年後(第2データ)の二度にわたって調査に協力してもらい、同一話者からそれぞれ45分間の自然談話を収録した。会話はリラックスした雰囲気の中で同じ出身国話者とのペアで行われ、合計34時間、約40万語分の会話データを本研究のために用いた。

4.3 分析対象

本発表は肯定文に表れる「所有を表す英語表現」‘*have got*’, ‘*have*’, ‘*got*’を分析対象とする。*Have got*はイギリス・オーストラレーシア英語で最も頻繁に用いられ(Kroch 1989; Quinn 2004, 2009; Tagliamonte 2013a), *have*や*got*は北アメリカ英語に特徴的な表現である(Tagliamonte 2013a, 2013b; Tagliamonte, D’Arcy & Jankowski 2010)。

4.4 言語内的要因

表3に示される5つの言語内的要因(主語が名詞句か代名詞か、1人称か2人称か3人称か、単数か複数か、総称か非総称か、目的語が抽象的か具象的か)をロジスティック回帰分析にかけ、その後要因ごとに詳細に分析する。

4.5 出現回数とバリエーション分布

第1データから456個、第2データから477個、計933個の使用例を抽出した(表4)。否定文と疑問文で用いられたものは除外し、肯定文で用いられた使用例のみ分析対象とする。本発表ではイギリス人のデータに限定して分析を行う。

表1: 「所有を表す英語表現」バリエーション分布

出身国	表現	<i>Have got</i>		<i>Have</i>		<i>Got</i>	
	データ	第1	第2	第1	第2	第1	第2
イギリス	N	119	136	91	76	7	7
	%	54.8%	62.1%	41.9%	34.7%	3.2%	3.2%
アメリカ	N	13	15	79	104	15	5
	%	12.1%	12.1%	73.8%	83.9%	14.0%	4.0%**
ニュージーランド	N	87	82	40	44	5	8
	%	65.9%	61.2%	30.3%	32.8%	3.8%	6.0%

Pearson Chi-Square (2-sided): **significant at $P < .01$.

表2: イギリス人の使用率変化とネットワークの重回帰分析

Variant	Predictor Variable	Beta	p	Adjusted R ² ; F; Sig.
HAVE GOT	英語母語話者	-.326	.046	Adjusted R ² =.216; F(1,13)=4.859; p=.046
1年後の使用率変化	ネットワーク			
HAVE	英語母語話者	.321	.034	Adjusted R ² =.247; F(1,13)=5.09; p=.034
1年後の使用率変化	ネットワーク			

表3: 「所有を表す英語表現」の言語内的要因

言語内的要因	例	
①種類	名詞句	<i>My sister has</i> the most amazing collection of bikinis.
	代名詞	<i>He's</i> always <i>got</i> this big smile on his face.
主語	1人称	<i>I've got</i> no idea where it came from.
	2人称	<i>You have</i> no idea when you listen to it.
	3人称	I suppose <i>people have</i> different ideas.
③数	単数	<i>I've got</i> something to tell you.
	複数	<i>They have</i> so many national holidays.
主語	④参照内容	It's the same as any city if <i>you have</i> friends there.
	非総称	<i>You've got</i> a beautiful family.
目的語	⑤種類	You <i>have much closer contact</i> with people.
	具象	You <i>ve got a nice blanket.</i>

表4: 「所有を表す英語表現」の出現回数

出身国	第1データ	第2データ	計
イギリス	217	219	436
アメリカ	107	124	231
ニュージーランド	132	134	266
計	456	477	933

2 *印はカイニ乗検定で1年間の変化に有意の差がある。統計分析にはSPSS Version 22を利用した。

3 被験者や言語データに関する詳しい情報はHirano (2013)を参照されたい。

5. 結果

「所有を表す英語表現」の *have got*, *have*, *got* を選択する上で、どの言語内の要因がどのくらい強い影響力を持つのかを見るため、SPSS のロジスティック回帰分析を利用する。ロジスティック回帰分析は特定の変異形を選択する上でどの言語内の要因が統計的に有意か、また影響力の強さの順位を評価するものである。

5.1 第1・第2データのロジスティック回帰分析

第1データと第2データそれぞれのロジスティック回帰分析結果を表5に提示する。*Have*の結果と*have got*の結果はほぼ対照関係にあり、スペースの関係上ここでは*have got*の結果のみを提示する。被験者の来日直後に収集した第1データでは、*have got*か*have*の選択を決める上で主語が名詞句か代名詞か、また単数が複数かの2要因が統計的に有意な結果となった。来日1年後に収集した第2データでは、主語が名詞句か代名詞か、目的語が具象的か抽象的かの2要因が統計的に有意な結果となった。第1・2データともに主語が名詞句か代名詞かは*have got*か*have*を決定する上で最大の影響力を持つ。

5.2 言語内の要因による*have got*と*have*使用率の変化

表5のロジスティック回帰分析で統計的に有意な影響を示した言語内の要因をここでひとつずつ詳しく見る。

5.2.1 主語の種類 (名詞句/代名詞)

表6が示すように、第1データに関しては主語が代名詞の時には*have got*が使用されやすく、名詞句の場合は*have*が選択されやすい。第2データも第1データと同様、主語が代名詞の時には*have got*が、名詞句の場合には*have*が選択されやすい。しかし名詞句の時に*have*が使用される割合は第1データから17%減少し、*have got*は22%上昇している。

5.2.2 主語の数 (単数/複数)

表7が示す通り、第1データに関しては主語が単数名詞の時には*have got*が選択されやすく、複数名詞の場合は*have*が選択されやすい。第2データも第1データと同様、主語が単数名詞の時には*have got*が好まれるが、複数名詞の場合は*have*に替わって*have got*が選択されやすくなっている。*have got*の使用率の変化は統計的に有意な上昇であり、*have*の使用率の変化は統計的に有意な減少である。元々*have*が優勢であった複数名詞主語の領域に、1年後には*have got*の使用が拡大されるようになったわけである。

5.2.3 目的語の指示対象 (抽象的/具象的)

表8が示すように、第1データに関しては目的語の指示対象が具象的な場合は*have got*が選択されやすい一方、抽象的な場合は*have*が選択されやすい。第2データでは目的語が具象的な場合は*have got*がより一層好まれるようになり、抽象的な場合は*have*に替わって*have got*が選択されやすくなっている。*Have got*の使用率は抽象的・具象的目的語の両方も1年後に上昇している。

表5: *Have Got* の言語内の要因のロジスティック回帰分析

データ	<i>Have Got</i> の言語内の要因	B	S.E.	Wald	df	Sig.	Exp(B)	95% C.I. for EXP(B)	
							Odds Ratio	Lower	Upper
第1データ	名詞句 / 代名詞 (主語)	2.869	.804	12.739	1	.000	17.618	3.646	85.148
	単数 / 複数 (主語)	-1.152	.343	11.306	1	.001	3.165	.161	.619
	総称 / 非総称 (主語)	.598	.466	1.646	1	.200	1.818	.729	4.532
	具象的 / 抽象的 (目的語)	.446	.302	2.181	1	.140	1.562	.864	2.822
	1/2/3 人称 (主語)	.328	.170	3.733	1	.053	1.388	.995	1.937
第2データ	Constant	-6.254	2.135	8.582	1	.003	.002		
	名詞句 / 代名詞 (主語)	1.648	.539	9.329	1	.002	5.195	1.805	14.955
	具象的 / 抽象的 (目的語)	.725	.298	5.935	1	.015	2.065	1.152	3.700
	総称 / 非総称 (主語)	.759	.522	2.114	1	.146	2.136	.768	5.941
	1/2/3 人称 (主語)	.213	.197	1.166	1	.280	1.238	.841	1.822
第2データ	単数 / 複数 (主語)	-.188	.354	.284	1	.594	.828	.414	1.656
	Constant	-5.243	1.935	7.340	1	.007	.005		

表6: 主語の種類別「所有を表す英語表現」分布

主語	変異形	<i>Have Got</i>		<i>Have</i>		<i>Got</i>	
		第1	第2	第1	第2	第1	第2
名詞句	使用数	2	8	15	16	1	0
	使用率	11.1%	33.3%	83.3%	66.7%	5.6%	0.0%
代名詞	使用数	117	128	76	60	6	7
	使用率	58.8%	65.6%	38.2%	30.8%	3.0%	3.6%

表7: 主語の数別「所有を表す英語表現」分布

主語	変異形	<i>Have got</i>		<i>Have</i>		<i>Got</i>	
		第1	第2	第1	第2	第1	第2
単数	使用数	94	97	47	48	5	6
	使用率	64.4%	64.2%	32.2%	31.8%	3.4%	4.0%
複数	使用数	25	39	44	28	2	1
	使用率	35.2%	57.4%*	62.0%	41.2%*	2.8%	1.5%

Pearson Chi-square (2-sided): *significant at $P < .05$.

表8: 目的語の指示対象別「所有を表す英語表現」分布

目的語	変異形	<i>Have got</i>		<i>Have</i>		<i>Got</i>	
		第1	第2	第1	第2	第1	第2
抽象的	使用数	49	65	51	49	2	5
	使用率	48.0%	54.6%	50.0%	41.2%	2.0%	4.2%
具象的	使用数	70	71	40	27	5	2
	使用率	60.9%	71.0%	34.8%	27.0%	4.3%	2.0%

6. 考察と結論

本発表は中期的な方言接触環境においてどのように言語変化が起こり進行していくかを検証するために、進行中の方言変化の実証を試みた。研究対象は英語を第一言語とせず特定の優位英語方言が存在しない地域で、移動性の高い英語母語話者が構成する多国籍アングロフォンコミュニティを調査対象に、英語方言接触の初期段階における文法項目の中期的な方言変化を考察した。来日 1 年後、イギリスグループは「所有を表す英語表現」の中でもアメリカ英語で頻繁に使用される *have* の使用を減らし、そのかわりにイギリス・オーストラレーシア英語で頻繁に使われる *have got* の使用率を増加させていた。その言語変化を言語内的要因の側面から分析することで、英語方言接触の初期段階において、イギリス人被験者による *have got* の使用が他の言語内的要因に拡大していく過程が一部明らかになった。来日直後は *have* が優勢だった言語内的要因のうち、主語が複数の場合、また目的語が抽象的な場合は、1 年後に *have* にとって代わり *have got* の使用が優勢になった。主語が名詞句の場合は *have* が優勢なことには変わりはないが、*have got* の使用率が大きく増加した。具体的な言語内的要因と変化の関係を検証することにより、方言接触の初期段階においてどの言語内的要因に顕著な変化が現れるかが浮かび上がった。長期間に及ぶ方言接触における文法的要素のバリエーションの変化の過程とメカニズムを解明するには、方言接触の初期段階の変化や中間的な変化の経緯を今後さらに明らかにする必要がある。

参考文献

- Britain, D. (2018). Dialect contact and new dialect formation. In C. Boberg, J. Nerbonne and D. Watt (eds), *Handbook of Dialectology*. Oxford: Wiley Blackwell. 143–158.
- CLAIR (一般財団法人自治体国際化協会). (2019). *JET Programme, Participating Countries*. <<http://jetprogramme.org/en/countries/>> (2019.11.4 閲覧).
- Coupland, N. (1984). Accommodation at work: Some phonological data and their implications. *International Journal of the Sociology of Language* 46: 49–70.
- Giles, H., and Powesland, P. F. (1975). *Speech style and social evaluation*. London: Academic Press.
- Hirano, K. (2013) *Dialect contact and social networks: Language change in an Anglophone community in Japan*. Frankfurt: Peter Lang.
- Hirano, K. (16 June 2016). Convergence or divergence?: Social network and grammatical variation in a community of expatriate English speakers. Paper presented at the 21st Sociolinguistics Symposium. University of Murcia, Murcia, Spain.
- Hirano, K. and Britain, D. (in press). Accommodation and Social network: Grammatical Variation in a Community of Expatriate English Speakers in Japan. *Proceedings of Methods XVI: Papers from the sixteenth international conference on methods in dialectology, 2017*. Frankfurt: Peter Lang. 89–102.
- Jenkowski, Bridget, L. (2005). “We’ve got our own little ways of doing things here”: Cross-variety variation, change and divergence in the English stative possessive. PhD General Paper, University of Toronto. Retrieved on 5 November 2017, from <http://twpl.library.utoronto.ca/index.php/twpl/article/view/19589/19646>.
- Kroch, A. S. (1989). Reflexes of grammar in patterns of language change. *Language Variation and Change* 1: 199–244.
- Milroy, L. (1980). *Language and social networks*. Oxford: Blackwell.
- Quinn, H. (1 October 2004). Possessive *have* and (*have*) *got* in New Zealand English. Paper presented at NWAV 33. University of Michigan, USA.
- Quinn, H. (2009). Downward reanalysis and the rise of stative HAVE *got*. In P. Crisma and G. Longobardi (eds.), *Historical syntax and linguistic theory*. Oxford: Oxford University Press. 212–230.
- Tagliamonte, Sali A. (2003). Every place has a different toll’: Determinants of grammatical variation I cross-variety perspective. In G. Rohdenburg and B. Mondorf (eds.), *Determinants of grammatical variation in English*. Berlin: Mouton de Gruyter. 531–554.
- Tagliamonte, S. (2013a). *Roots of English: Exploring the History of Dialects*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tagliamonte, S. (2013b). The verb phrase in contemporary Canadian English. In B. Aarts, J. Close, G. Leech and S. Wallis (eds.), *The verb phrase in English: Investigating recent language change with corpora*. Cambridge: Cambridge University Press. 133–154.
- Tagliamonte, S., D’Arcy, A., and Jankowski, B. (2010). Social work and linguistic systems: Marking possession in Canadian English. *Language Variation and Change* 22: 149–173.
- Trudgill, P. (1986). *Dialects in contact*. Oxford: Blackwell.
- Trudgill, P. (2004). *New dialect formation: The inevitability of colonial Englishes*. Edinburgh: Edinburgh University Press.